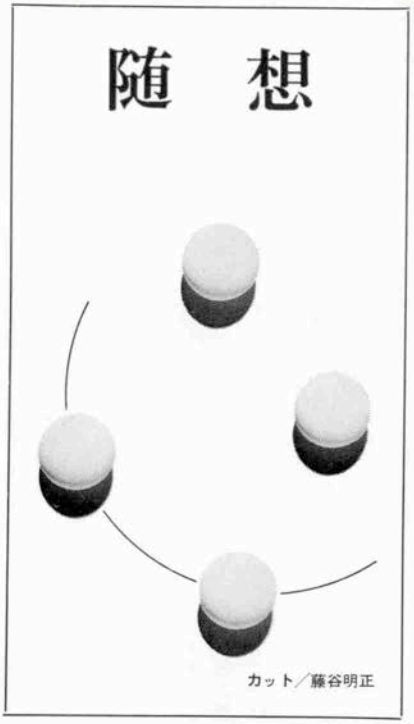
随想



カット／藤谷明正

タンゴと演歌 二つの心の歌声

ルイス・カナレス
〈京都外国語大学講師〉

世界にはいろんな音楽があり、それぞれの社会の一部を形づくっているものです。私が初めて日本へ来た時、日本人の音楽好きには驚きました。学生のコンパでは手拍子で歌を唄うし、結婚式には誰かが唄い、歌声喫茶ではお客さんが自分ののどを披露しますし、徳島市では阿波踊りの4日間というものは町全体がつんぼになるほどです。私は日本人がマンボからチャチャ、サンバからタンゴにいたるまでラテン音楽が大変好きなのに強い感銘を憶えました。日本のラジオでは毎日ずい分多くのラテン音楽が流されています。考えてみればラテン民族と日本人は強い似通った性格をもっているようです。つまりどちらもロマンチックだということ。日本人とラテン民族は悲しい恋の歌を愛し、ロマンチックなラテン民族の一人である私も日本の演歌が大好きになってしまいました。

タンゴと演歌は歌に関する限りずい分多くの共通点をもっています。どちらも悲しみや孤独を絶叫し、演歌は日本人の心、タンゴはアルゼンチンの人々の心そのものです。

タンゴの代表的な歌い手であるカルロス・カルデルとリベルタド・ラマルクは森進一と八代亜紀に相当します。演歌は貧しい町の通りで生まれタンゴはブエノスアイレスのスラム街で生まれました。

演歌は明治の中頃から昭和の初期にかけて演歌師によって唄われ社会の風俗を風刺したようなものもありましたが、その後すたれて戦後、流行歌として再びギターとアコーデオンで街角や飲み屋で唄われるようになりました。タンゴには歌と踊りがありますが、どちらもブエノスアイレスの最も貧しい人たちの間に生まれています。タンゴは貧しい移民や、「クリオロ」と呼ばれるスラムの土地っ子の心を表現しており、ブエノスアイレスに住む移民にとっては望郷の気持を伝える一つの手段でもあったのです。ですから演歌もタンゴも当時の社会を批判し、社会の不正に対して人々の権利を要求する大衆の叫びだったのです。今日の演歌やタンゴも共に人々の望郷の気持、失った恋人、死んだ母親、人生の悩みや苦しみを歌っています。

「冷たい心。私は泣いています、冷たい町あなたを待っています。あなたに会いたい涙がこぼれてお酒飲むの慣れました……」のような表現のない演歌やタンゴはありません。たとえば森進一の「銀座の女」の最初の一節「夢を失くしてまた広い、明日は咲こうとする

女、そして傷つき泣きながら、それでも夢を、それでも夢を」などはタンゴの心そのものです。両方の様式で大事なことはいろんな所にお酒の表現があることです。たとえばタンゴの「ノスタルヒアス」には「私の心を酔わせてしまいたい……」とか「最後のさかずき」という歌には「友よそそいでくれ、サァ一杯そそいでくれガラスのふちまでシャンペンを、今夜は楽しくドンチャンさわぎで心の中にある悲しみを吹き飛ばしてしまいたい」など。もし日本人がタンゴを踊りだけでなく歌もよく知っているならば、歌の意味はわからなくても、その心はよく伝わるのではないかと思います。

ロマンより食い気の旅

焦　梅華

〈「Wine & Dine MAY-HWA」オーナー〉

今年の一月に友人二人と初めての一カ月の長旅に挑んでみました。題して「華麗なる独身トリオ　アメリカジプシーの旅」

一月という寒い時期を選んだにもかかわらず、一カ月の間に四季を味わうことができ、とてもハッピーかつラッキーな旅行でした。いろんなことがありましたが「食べる」ことに焦点を絞ってお話したいと思います。

華麗なる独身トリオ
（ディズニーランドにて　左はし筆者）

旅に出て何が楽しいかといえばやはり食べることにつきると思います。私も神戸で中華料理のスナックを経営していますので食べることにはとても関心があります。

私たちが訪問したコースはロス、ボストン、ニューヨーク、ワシントン、ルイヴィル（ケンタッキー）ラスベガス、サンフランシスコ、ロス、ハワイなんですが、行った先々で熱烈歓迎を受け、暴飲暴食の毎日。友人二人は英語が不得手なので私が連日得意な日本語・中国語・英語を巧み？に繰り、事をスムーズに運びました。おかげでみんな太って帰国しました。旅に出て太って帰ってくるという話はあまり聞きませんが……。

私にはロスとN・Yに親類が計二十人程いまして、彼ら全員に逢ってきたので、我々フリーで行動することはほとんどありませんでした。中華料理店を経営している親類の店で連日、中華料理攻めでしたが、食べ鉋きることなく満喫しました。

アメリカの料理はまずいという先入観をもっていましたが、予想は裏切られました。アメリカ人自身がアメリカ移住前の自分達に戻って祖国の味をと努めたそうですが。某新聞によりますと人々はアメリカの移住後、アメリカ人になりきろうとして自分の祖国の味を忘れ、ハンバーガーを主にした食物が多くなり、それが今でいう純アメリカ料理になったということが書いてあったので、興味深く読んだものですが。そういえば〝JACK　IN　THE　BOX〟（ハンバーガーの店）という看板がやたらと目につきました。いずれにしても案内して下さった人達が良かったのか連日の美味しい味めぐりでした。親類を見てて中国人は食べ好きだな、と思いました。お酒のはしごじゃなく、夕食のはしごをしました。満腹にめげず食べられる自分達にあきれたり、本当に楽しい想い出です。

私たちは西から東へ、東から西へと移動しながら世界の料理を楽しみました。中華料理を初め、イタリア料理、メキシコ料理、海鮮料理、日本料理、南部料理、工夫をこらした家庭料理、どれもすばらしく、中でも特に印象に残ったのは四川料理に似て香辛料のきいた湖南料理でした。食べる話ばか

りで恐縮ですが、旅行の三分の二は食べることに没頭しました。ロマンより食い気を求めて……。

日中友好平和条約後、私の親しい日本の友人が中国へ訪問するので一種の焦燥感に襲われ、私も近い将来台湾にも中国大陸(江蘇省)にも行って本場の中華料理に舌つづみして、しっかり我が祖国を見て来たいと思っています。

ヨガを通して見た日本

エドワード・ボーン

〈ヨガ講師〉

五年間日本に住んでみて、私はもし自分が本国にいたならばとても得られないようなさまざまな体験をすることができました。

何度か日本を訪れた後、一九七三年から私はヨガを教え始めましたが、今はどこにも所属せず、仕事としてよりも趣味として一人で教えています。ヨガは一つの生活の方法であり、バランスと調和を保つのに役立ちます。

私たちの生活には三つの基本的なもの、つまり、「物体」、「精神」、「霊」があります。「物体」はもちろん身体や、それに影響を与える食事、睡眠、運動、休息や生活環境であり「精神」は知恵や思考方法、態度や感情であり、「霊」は自分を偉大だと感じさせるようなもので「魂」ともいえます。ヨガの訓練はこの三つの全面的な発達をうながします。

ヨガの教室で私たちは気分を柔らげ、身体を気楽にし、緊張をときほぐし、神経組織を強めるために訓練や呼吸方法を教えます。そして最後に心を落ち着け、集中力を高めるために冥想に入ります。世界の他の国々と同様に日本でもヨガは今や大変大切なものになってきています。このようなセカセカとした日本人の生活では緊張をときほぐし、リラックスすることがぜひ必要だし、肉体的にも精神的にも大変エネルギーを消耗する日本ではヨガを行うことによって内的自我は落ちついて安らかになります。

私はヨガを自分の職業としてでなく、趣味として教えているので生活費を得るためにアメリカから日本へ自然食品を輸入する仕事をはじめています。アメリカでは多様な自然食品が手頃な値段でたくさん出回っていますので、日本人にも利用してもらうためにそれらを輸入することは素晴しいことだと思っています。

日本人、とくに子どもたちは私が知っているどの国の人たちよりも多くの甘いお菓子をたくさん食べます。のどがかわけば、たくさん糖分の含まれた飲み物をどうしても飲まざるを得ないようになっています。

日本でも白砂糖や加工食品についての危険性、食品に香りをつけたり、着色したり、保存用のために多くの有害な薬品を使ったりすることの危険性について次第に気づかれるようになってきましたが、私はもう三年から五年もすれば日本で自然健康食品ブームが起ってくるだろうと信じています。

日本に住んでいる限り、私たちは日本の文化を学びたいし、三才になる息子にとっても、良い礼儀作法をもち、年長者を尊敬する日本人と暮すということはとてもよい勉強になるだろうと思っています。

また私たちも、私たちがもっているアメリカの文化の中からすぐれたものを日本の人たちに伝えていくことができれば、と願っています。

美しい奥さん、かわいい坊やのボーン一家

□ある集いその足あと

5WORKとぼんくら展

森　英夫〈造形〉

なごやかながらも真剣な批評が飛びかう
真鍋氏の混虫採集展より

'75年5月ながいけいいち・堀尾貞治・松島茂勝・宮崎豊治・森英夫の5人がそれぞれの立場で仕事を進め活躍する中で、寄り集って展覧会を持とうということになりWORKの名称が生れた（5月姫路・ギャラリーdoi、高砂・内海画廊）。その後5人展だけでなくテーマを企画して近在で仕事をしているそれぞれの仲間にも呼びかけて意味のある展覧会ができたら良いということになった。

その年の6月面展（神戸・ギャラリー・メトロ）、8月プリントピロジェクト（室内小学校）を催すことでメンバー15〜16人になった10月、酒房ぼんくらの壁を装飾がわりに毎月変化をつけるという口実で第1回の〝ぼんくら展〟を企画した。

店はそれまで緑の立縞の壁に赤い富士山の工芸額と観光土産の藁細工がぶらさがっていた壁にかわって、布ぎれだの木片だの、石ころだの樹脂だの、箱だのロープだの紙といった材料を活かした造物品が壁面いっぱいに取り付けられ天井から吊り下げられるに到り、額に入った美しい情景画を予想していたかも知れない店のおやじの目に、ほんまにこれが美術品かと疑いをもたせてあきれ顔をされたのを今でもはっきり記憶している。おやじとしても一旦渡した壁面や煮て喰おうが焼いて喰おうがかまわん、そちらさんの企画に口出しはせんと言ったものの内心えらい奴らに壁を任せてしもたわいと思ったに違いない。前衛作品を展示している酒場と、ある新聞に載ってからも新しい企画のないまま4カ月間展示をそのまま続けていた。'76年4月山口牧生氏とお嬢さんのさと子さんの2人展がぼんくら個人使用の初名のりとなり以降今月まで30数名のメンバーで企画展や個展を続けて壁面を賑わせている。

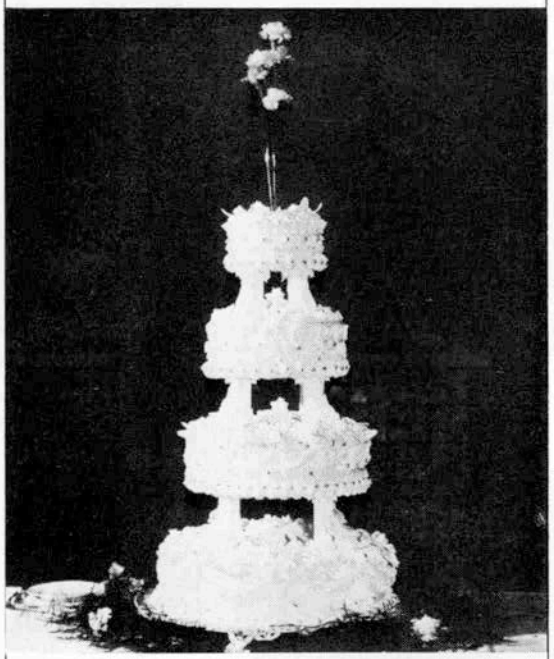
自分は芸術のことは門外漢やからようわからんけどというおやじの口ぐせからはじまり、ここに作品を持ってくる皆さん方が、一生懸命何かを創ろうとしている気持は人間のイキザマを見ているようで自分とは生活の方法は違うけど人それぞれのイキザマとして解るような気もする。が、しかし作品の良し悪しは今だにようわからん毎回々々ケッタイな作品ばかり皆さんよう持ってくるわ……。と言いながらも一年もすぎた頃からおやじが、自分から進んで『ぼんくら賞』なる粋なはからいを提唱してくれるのである。

酒房ぼんくらは近辺の商社や商店、会社に勤める人の昼食の場であり、夕方からは勤め帰りのサラリーマンが気やすめに立ち寄り、おやじとの旧交を温める赤提灯のおでん屋である。月々の作品の入れ換え日がメンバーの集まる割勘パーティの日である。少量の酒で長く居すわり儲からぬメンバーを相手にして営業不振で店じまいするか、我々の企画が尽きて壁面が元に戻るかの根くらべである。

酒房ぼんくらは全てに控え目で理解のあるやさしい奥さんの煮付けの味とおやじの毒舌とで店は今なお続いている。

□国鉄兵庫駅西口から北へ50Mほどの緑樹地帯の歩道を通りぬけ神戸高速鉄道大開駅を更に北100Mほど歩いた所にある赤提灯の店・店主東郷猛（電話576・4881）

純白無垢



ドイツ菓子 Fachein's

ユーハイム

本店	三宮生田神社前	TEL (331)1694
三宮店	三宮大丸前	TEL (331)2101
さんちか店	三宮地下街スウィーツタウン内	TEL (391)3539
西ドイツ店	フランクフルトゲーテハウス内	TEL (0611)280262

きもの工芸

おんがら屋

神戸

本部・仕入部	神戸市東灘区青木五丁目一五～一九	電話〇七八—四五二—五二九〇（代）
本店	神戸市生田区三宮町二丁目一—五	電話〇七八—三三二—五二九八（代）
さんちか店	神戸市生田区三宮町一丁目一	電話〇七八—三三二—一七〇〇

東京

銀座コア店	東京都中央区銀座五丁目八—二〇（四階きものコア）	電話 〇三—五七三—五二九八（代）
銀座メルサ店	東京都中央区銀座五丁目七—一二（六階和装街）	電話 〇三—五七四—八〇六五（直）
渋谷東急店	東京都渋谷区道玄坂二丁目二四—一（五階呉服売場）	電話 〇三—四七七—三四〇九（直）
日本橋東急店	東京都中央区日本橋通一丁目九—二（四階呉服売場）	電話 〇三—二一一—〇五一一（代）（内線二九四）
池袋パルコ店	東京都豊島区南池袋一丁目二八—二（四階きもの小路）	電話 〇三—九八七—〇五六一（直）

□神戸市外国語大学と神戸〈1〉

灰燼の中から

田島　博
〈神戸市外国語大学教授〉

終戦の翌年、昭和二十一年の春、神戸のまちは焼け野が全体の三分の二をおおい、急造のバラックもまばらで、焼け残ったコンクリートの建物がまるで歯の抜けたあごのような街の姿を一層ぶざまなものにしていた。戦災のあと片づけが精一杯で、余力のあるはずがないこの時期に神戸市は、神戸市外国語大学の前身、神戸市立外事専門学校を創設した。

ずいぶんと思い切った、むしろ無謀にちかいくわだてだった。平常の時でも、専門学校を一つ創設するということは、たいへんな事業である。物資の欠乏は最悪の様相を呈し、人は飢えている。だいいち、文部省が、被災都市における高等教育機関の新設を一切認めない方針をうちだしていた。よほどの特例として認可をとりつけたにしても、校舎の新築はとても望めない。市内の小中学校は大半が罹災しており、校舎は極度に不足している。そんな悪条件が積みかさなるなかで、あえて創設にふみ切ったのだから、当事者の外事専門学校によせていた期待のほどがうかがわれよう。灰燼の中から立ちあがる新生への願いと夢がこめられていたのである。

神戸は、港として生まれ、港として育ってきた。神戸に未来があるとすれば、やはり港としてよりほかにないという信念が外事専門学校設立の根底にあった。船舶、港湾など物的なものの復旧、それと相俟って国際社会に進出する人的資源の養成を考えたのは、いかにも国際港都神戸にふさわしい発想であった。

既存の東京、大阪の外事専門学校にくらべると語科の数は極端にすくなく、英語、中国語、ロシア語の三語科にすぎないが、そのうち英語科は四クラスあり、全校生徒数は八百四十人だから、生徒数からいえば、規模はそれほど小さくはない。要するに、生徒を多数の語科にばらまかず、重点的に三つの語科に集めたのである。貿易、外交などの面で、戦後の日本の運命と密接なかかわりをもつと想定される国々のことばのうちから、主要なもの三つをえらんで語科をきめたわけで、当時の情勢にもとづくこの判断には、三十余年を経過した今考えても大きな誤りはなかったように思う。

外国語の専門家というよりも、外国語の能力をそなえた貿易人、国際人の養成をめざすこの構想

は、当時の市長中井一夫、助役滝谷善一両氏を中心に立てられた。それが、昭和二十一年二月の臨時市会に上程、可決され、三月には、市長以下関係者の努力がむくわれて文部省も特例としてその設立を認可した。つづいて四月には神戸市立外事専門学校創立委員会が、中井市長を会長に、滝谷、向井両助役を副会長として発足した。委員は二十名で、神戸市在住の各界有識者がえらばれた。

初代校長には、現神戸大学の前身、神戸経済大学の教授であった金田近二氏が内定しており五月に入学試験六月一日には入学式の予定で、終戦から九カ月、市会上程からわずか四カ月たらずで開校というまるきり無茶なスケジュールだった。このスケジュールをともかくもこなして、第一回生二百数十名の入学式を予定よりわずか遅れた六月十日に挙行できたのは、産みの親である市長助役はじめ市当局の強力な後押しがあったからこそだが一方では、金田近二校長の凄まじいばかりの熱意におうところも大きい。金田校長は滝谷助役が以前神戸経済大学教授であった頃の同僚で、その関係から校長の職を引きうけられたのだが、誠実で、おそろしく勤勉であった。大きな鞄をさげ、やや前かがみに急ぎ足で市役所に日参する金田校長の姿は、吏員のあいだでも評判で、あの校長さんに頼まれると何ごとであれ断われなくなると取り沙汰されていたと聞いている。

私が外事専門学校の設立に参加したのは、第一回入試委員会の顔合わせの席がはじめだった。場所は、神戸経済大学の金田研究室。集ったのは、金田校長のほか、山下修、広江貞助、河合慎吾、大芝孝の諸氏に私をくわえて六名。それが、校長以下教官全部で、教授会の全構成員でもあった。山下氏と私は英語、広江氏は経済学、河合氏は社会学、大芝氏は中国語の担当で、ロシア語の担当者は居なかった。とにかく、それだけの人数で、問題の作成から印刷、仕分けなど入試の作業全部に取り組んだ。徹夜に近い作業が何日かつづいたことを記憶している。入試の科目は、英語のほかに、常識問題と作文だけ。それが第一次試験で、その合格者にたいし第二次試験として面接をおこなった。試験場は当時の市立第二高女がはいっていた現外大学舎と今の高羽小学校とである。入試の採点がはじまる頃には、体育の小原明男、ロシア語の小松勝助の両氏がくわわり、六月、大開国民学校あとで開校した時には、さらに、英語担当では若江得行、竹内清海の両氏と外人教師S・A・パードン氏、中国語担当に坂本一郎氏、その他独、仏語の講師などがくわわって、教官の数は校長以下十五、六名になっていた。

外専校長・初代校長　金田近二

□ずいそう 踊らなソンソン

えと文／たかはし もう〈漫画家〉

何かのひょうしに『もうさん一ぺん阿波踊り見にいこか……』と田辺聖子さんが言い出したのがはじまりだった。私は阿波の徳島産で、踊る阿呆の方だったから『見に行ったってしゃあない…踊らにゃ…』と言ったのが、連を作るきっかけとなった。アルコールの勢いも手伝って、話がだんだんエキサイトしたのである。この話が出たのは、信州は松本の温泉旅館で、日経の連載小説〝中年ちゃらんぽらん〟の取材旅行中の事だった。そのときは聖子さんの構想の中に、この阿波おどりの場面があったかどうかはしらなかったが、同行していたカモカのおっちゃんも、日経の河塚記者も、私も、あたかも、現地でヨシコノ囃子に乗っているかのようになって心は浮いて来たのである。去年の六月上旬のことである。最初のうちはコネをつけてどこかの連に入れてもらおうかという話からはじまったのが『それならいっそ連を作ったらどうか』『揃いの浴衣を作ろう』『連の名前をどうする…』となって来た。話は酒に乗り、まだ予約もしていない連絡船に四人はすでに酔っ払って乗っているかのようである。私は地元の利で、なんとかなるのではないかとは思ったが、なんせ、阿波踊りは八月中旬、もう時間がない。

『あと二カ月やから無理かもしれんが…よし徳島に電話を掛けてみよう』ということになったのが抜きさしならぬ羽目となり〝カモカ連〟は誕生したのである。翌朝酔いもさめてカモカのおっちゃんが言ったそうである『お聖さん…あんなこと言うてええのんか…』それをうけて聖子さん『なんや…やったらええやないの』と言ったそうである『もうさん女ってこわいなァ…』と、おっちゃんは感心していた。

〝踊る阿呆に見る阿呆…〟今年はカモカ連も二回目「参加者72名」となったが、参加者は新旧半々、男女もほぼ半々というところである。参加の動機はどうであれ、一旦踊ったら、病みつきになって来るのが阿波おどりである。一回目も二回目も新参加者は、ほとんど生まれて始めてという人ばかり、中には集団行動はとったことがないという人もいた。それに、上から読んでもカモカ、下から読んでもカモカである。有名も無名も、上も下もないというのが、このカモカ連であり、阿波踊りの特色である。そもそも、四百年前町民から盛り上がり、蜂須賀公が無礼講とした踊りだというから、カモカ連は四百年前を地でいっているわけだ。

一泊二日の行程だから、どうしてもハードスケジュールにならざるを得ないのが気の毒なのだ。指定旅館に着くと同時に着替、食事、踊りの特訓となる。中にはモモヒキを反対にはいて『もうさん…これキツイキツイ』。

買い切ったホテル宝泉閣は一時はてんやわんやの大騒

まかり出ましたカモカ連の踊る阿呆達は神戸・大阪・東京の混成チーム72名の美男美女でゴザイマス。<徳島宝泉閣前で>　撮影／北出富雄

ぎ、エライコッチャエライコッチャである。ホテル前で地元の若獅子連のお囃しに乗っての練習、仕立おろしの揃いの浴衣、白タビが夕暮れのアスファルトにクッキリとさえている。私も、最初はどうなることかと思っていたのだが、カモカ連の案外呑み込みの早いのに感心した（これ…ホント）。

ホテルの近所の人達も私達の練習ぶりをニコニコしながら見物に集まって来る。練習しているのは新参加の人達が多く。去年来た第一回の〝卒業生〟は〝後輩〟の練習ぶりを眺めていて、ときおり、〝後輩〟に注意をあたえる程になっているではないか。エライヤッチャエライヤッチャである。だんだん人に見られることに慣れてくるころになると阿波踊りのだいご味がわかってくる。貸切りバスで演舞場へ出発するころには、やる気が湧いて来た様子で、バスに乗り込む足も軽い。去年と違って今年のカモカ連は堂々?として演舞場の入口で足を震わせている者はいなかったようだが。去年の場合はほとんどが初体験ということもあって、いよいよ本番となると、みんな真剣な面持ちで、演舞場の雰囲気に圧倒されたのか、みんな立ちすくんでいた様子だった。両側の桟敷は観客で満員である。なれた私でも、長さ二百五十米、巾二十米位の踊り場だがバカに広く感じるのだから、初めての人が足が震えるのも無理はない。ところが、無我夢中で踊り過ぎたとたん『ヤッタ！ヤッタ！』と両手をあげて躍り上がるのである。この瞬間は、青ざめていた顔が上気して興奮さめやらぬといった顔顔顔である。市内には数カ所の演舞場があるが、一晩ではとても回りきれないのだが、次の演舞場に出場するころには、みんな自信満々『まだか…まだか…』と順番を待ちきれない様子。いよいよ二回目の出番が近ずく、そのころには、みんな場内を見渡す余裕が出来ていて最初の震えはどこへやら『ここは観客が少ないぞ』ときた。踊るアホウに見るアホウというけれど、見るアホウあっての阿波踊りである。が、やっぱり〝踊らなソンソン〟でありますなァ…。

□ずいそう／「紅蓮童女」神戸初演を終えて

生田の森の風と雨

笹原茂朱
〈劇団夜行館・座長〉

八月二十五日午後五時。西陽の射し込む生田の森に辿り着く。一年振りの神戸である。

私どもの住んでいる弘前は、そろそろ秋風が立ち始めたというのに、この強い陽射しにまたねぶたの夏がやって来たような錯覚さえする。

社務所で福田義文宮司さんと久々の再会であつい握手をかわす。福田宮司さんには六月初旬に北海道での会議の帰途、奥さんと一緒に弘前の稽古場にも立ち寄っていただき、私どもの住んでいる弘前はどんな街か、あわただしい日程のなかを見ていただいた。私はたまたまNHK・FMの「日曜喫茶室」に画家斎藤真一氏と対談のため東京に出掛けていて会えなかったが、そんな縁もあって一年振りの生田の森は、私どもにとって境内の樹木も土も昨年以上に馴じみの深いものがあった。

宿所には斎館を自由に使用させてもらい、翌二十六日早朝から小屋掛けを開始する。炎天下に汗を噴き出しながら五時過ぎには小屋の骨組みも出来、屋根にシートを掛け順調に一日が終ってほっとする。

それも神戸の藤原康孝君が〝助っ人〟役を引き受けてくれ、連日丸太の上をよじ登っての大活躍で、二十八日夜にはわずか座員七人の芝居小屋とは想えぬガッシリとした迫力ある小屋の器が出来上った。

藤原君は昨年の生田の森での「鬼神お松」を見て、ねぶたにやって来て、今年のねぶたにも弘前へやって来て、私どもとは気心がしれていたとはいえ、彼の身のこなしの速さには驚かされた。丸太を荒縄で結える最も原始的な作業と彼の専攻する容接工学とどこでどう結びつくのか、私どもとの不思議な出会いである。

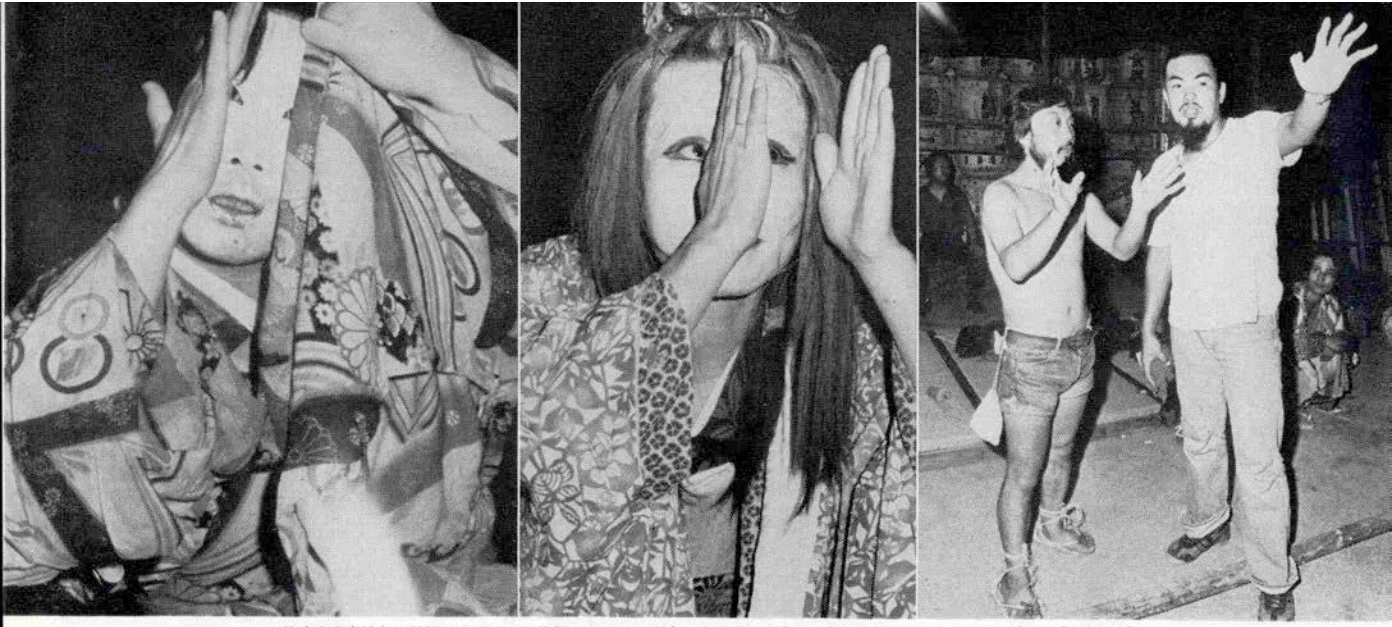
芝居とは不思議なものである。座員があり余るほどいて、役者もあり余るほどいることより、わずかに役者が四人というギリギリの制約のなかで台本を書くことによって、結果的には役者一人一人の限界まで書き込むことで密度のある台本が書けたと私などは想っているが、それに今回の芝居中も、役者が四人舞台に出ずっぱりで、効果は私が担当し、照明はこんがら童子がつきっきりで手が放せぬため、場面移動などは「木戸」担当のせえたか童子、藤原君の手を借りなくてはどうにもならなかったのだが、私はこれまでの経験で、芝居は一人一人が目いっぱいの、制約があればあるほど予期せぬイメージが見えて、芝居を逆に密度高くするものだと想っている。

初日には木戸受付の〝助っ人〟に、藤原君の友人や磯本治昭氏や榎忠夫妻が駆けつけてくれ、京都からもねぶたの仲間が連日やって来て、皆揃いの夜行館の法被を着て昨年よりも賑々しく木戸に立っていたので、ある観客から今年は座員がずい分増えましたねといわれるほどであった。

だが、今回の神戸の初演が大盛況の大入りで無事終えることが出来たのも、生田神社であったからに違いないのである。

福田宮司さんは夜遅く連日小屋をのぞいては細い配慮

え・中西　勝



熱演する守鏡丸の甘酒のおばば、阿修舞のこきん。深夜に及ぶ立ち稽古で、茂朱座長とせえたか童子（撮影／竹内広光）

をされ、神社の方々の心遣い、斎館の掃除のおばさんにいたるまで何かと気を遣ってもらい、かがり火といい私どもの想い通りに境内を使わせてもらったことが、どれほど芝居に深くのめり込めたかはかり知れない。

かって社寺が日本の芸能の発祥であったとしても、何世紀も経て諸々の芸能の源流が滅び去ったこの七八年の世に、私どもの小屋掛け芝居が生田の森の境内に一本の樹木と同じように、ノボリをはためかせてかつての芸能の自然な形で、つかの間、神戸のド真中に在ったということは、私どもにとって生田の森こそ二十世紀末の現世に甦えった小屋掛け芝居の〝発祥地〟のようにすら想えてくるのである。

ところで、小屋掛けで一番怖いのは雨であるが、これまで初演のときはこちらがためされているように雨と風に激しく襲われた。「紅蓮童女」の初日も朝から風が強く、開演時刻になっても吹きやまず、そればかりか効果の吹雪の音を高くすれば、フワーッと小屋のなかに凄じく吹き込んでピッタリ芝居のなかに入り込むように吹いていた。私は効果の音を出しながらこの風は間違いなく北の恐山から本州を突き抜けて私どもをためすというより助けるために芝居のなかに吹き込んでいるのだと想えてならなかった。この日芝居が終ったとたん風もピタリとやんでいたのである。

楽日の三日は激しく雨が降り続き、ラストシーンの外でのかがり火に照らされて踊る手踊のシーンだけピタリと雨がやんだ。

この「紅蓮童女」の芝居には、私どもが津軽の冬に閉ざされた五年の歳月の、あるいは大八車の歳月を入れれば七年の旅のシワをセリフの片隅にひそかに刻み込んでいるところがあるが、だからこそ、生田の森の「紅蓮童女」初演の風と雨は、私どもの新しい旅立ちと重なって、この先き深く心にのこるに違いない。

そして一年の暦をめくり終る頃、再び新作をたずさえて生田の森へ元気な姿で戻ってきたいと想う。

★キャンペーン
国際文化都市神戸を考える

ポートアイランドを国際親善の基地に

アンドレ・ブリューネ〈フランス総領事〉
K・J・スタットマン〈オランダ総領事〉
ハンス・シェラー〈スイス総領事〉
Dr・ヨハネス・プライジンガー〈ドイツ連邦共和国領事〉
ポール・ファウスト〈「関西タイムアウト」紙記者〉

⑫

★外国人にとって住みやすい神戸

ブリューネ　今度、東京から神戸へ転勤して住むようになって、初めて神戸の雰囲気を感じるようになりました。仲々いい雰囲気です。東京と比較すれば、東京は一つのセンター、中心部がなくて、銀座があれば新宿もある、渋谷もあれば池袋もありますね。いつもどこへ出掛けたらいいか迷ってしまいます。神戸の場合そうではない。山を下りたらすぐ三宮、元町の方へ出るわけですね。人間的なスケールというか、それが非常に魅力的だと思いますね。それが最初の印象です。二番目の印象は、東京では自然からシャットアウトされているという気持ちが強いですが、神戸はそうじゃない。海岸通にある領事館の屋上まで行くと、ちゃんと山も見えますし、海も見えるわけですね。自然との接触が切られていないという印象です。

プライジンガー　神戸の人たちを他の都市の人たちと比べれば、気持ちが広いと思います。多分、港町のせいでしょう。もうひとつ理由があります。大分前から多勢の外人が神戸で暮して来ました。明治時代からヨーロッパ人が多勢来ました。そのせいもあると思います。もちろん、そのなかにはドイツ人もいました。文化的にヨーロッパの建築様式の影響があります。異人館として残っています。

異人館については、市役所が新しくして博物館にします。それは本当にいい方針です。異人館も神戸の自分の歴史ですから。神戸の町の歴史です。

歴史的にみて神戸はいつでも外人と一緒でしたね。外人と一緒に生活するのが、神戸の人たちの特徴だと思います。

ブリューネ　百年前から外人との接触に慣れているから今でも伝統というか、習慣というか、それが残っている

わけですね。

ファウスト　アメリカは非常に大きな国なので、スペースのあることに慣れておりましたので、アメリカから最初に日本へ来たときは、何でも非常に近いと感じました。銀行へ行くのも、ショッピングにしてもクルマなしでどこへでも行けるほど近い。アメリカでは何をするにしても、何処へ行くにしてもクルマがなければダメです。特に交通については日本は非常に利点がある。近くにあるということで、町の生活、あるいは、人との交流が非常に楽しめる利点がありますね。特に神戸の場合は、海と山が近いことがひとつの大きな特徴ですね。また、アメリカとかヨーロッパとか、国とか地域に限らず国際的な交流が本当に芽生えて来ているように思います。

シェラー　私がこの二十四年間にあちらこちらに行ってまいりました経験から申しまして、神戸に着いたときは自分の家にいるような気安い気分になりました。私の家内もそういっています。神戸に住んでいるのは非常に楽しい。大阪と比べると、大阪はあくまでビジネスのセンターで、それに比べると神戸は山があり、海があり、特に上からの眺めがいい。天気のいい日には神戸全体、あるいは大阪まで見渡される。非常に自然に近い。また、町中でも神戸の人は非常に魅力があり、非常に親しみを覚えます。仕事の上からいっても、公的なつき合い、特に神戸市とのつき合いでも、神戸市は外国人とのつき合い、折衝に慣れておられて、私の仕事も非常にスムースに行きますね。

ブリューネ　今、おっしゃったように、特に市役所の当局をはじめとして市長さんは非常に外国人の生活、活動に対して深い関心をもっていらっしゃるわけですね。特に市長さんの場合はそういえますね。

スタットマン　私は一九七四年に神戸へ来ました。来年の二月には退職をしてニュージーランドへ行きます。

私は長年、外務省に神戸へ行かせてくれるように頼んでいました。第二次大戦中にドイツの捕虜収容所にいましたが、そこに神戸へ行った人がいて、いろいろと神戸のことを聞いていましたので、東京よりも神戸へ行きたかったのです。オランダ人にとって興味のあることは、神戸はロッテルダムと姉妹都市の関係にあることですね。そういうことからも東京より神戸の方が好きです。

歴史的にみてもオランダと日本とのつながりは、長崎の出島を通じて古くからありますが、オランダ総領事館そのものも日本で一六〇年ぐらいになります。そういう関係でオランダ人と神戸との交流も古いわけですね。

私が神戸を選んだのは、神戸の町を気に入ってるからです。第一に町全体が平行に細長い帯状になっている。だから、道を捜すのにも便利だし、同時に交通の停滞も東京に比べたらウンと少いし、そこへもって来て、外国人向けの教会、学校、病院があり、そういったものの便利さは大阪に比べてはるかに多いですね。神戸はすべてにおいて西洋人にとっては住みやすいところですね。それと同時に、特に総領事の立場から留意するのは、港の重要性ですね。

★外国との交流は広く深くなっている

ファウスト　以前、ビジネスの町大阪に住んでいたときは、非常に日本的な生活を強いられていました。考え方にしてもそうですね。「先輩」「後輩」とか、「義理」「人情」とか。ところが、神戸に来ると外国人の社会が存在しているからというわけではなくて、日本人の社会が非常に助けてくれる。大阪だと間違ったことをいっても誰も指摘してくれない。そのために同じ間違いを何回も繰り返すということがあります。それに対して神戸だったら親切にいってくれるので間違いを訂正することができる。ショッピングに行っても、そこの店員が外人としてではなく、住民として共通の場をもつようにしてくれます。

シェラー　今、六甲に住んでいるのですが、その近くでショッピングをすると、お互いに顔見知りになって、い

ろいろと助けてくれて、心の交流ができます。外人の社会についてもイギリス人とかアメリカ人とか国籍によって孤立しているのじゃなくて、国際的な共同体として日本人のなかに存在して、日本人との交流がある。そのなかで、何国人というのじゃなく、外国人として非常に気安く生活できるよさがある。

ただ、一番大きいのは言葉の問題だと思います。言葉が解れば自動的にこちらに住んでいる方とコンタクトができて来る。これは、もちろん、外国においても外人の状態というのは一緒だと思うんですが、あくまで、全体のなかの一部を形成するようにしないといけない。スイスについていうと、外国人労働者は一八パーセントにもなるんですが、そういう人たちをスイス人が積極的に助けようとしない。両方からの行き来がないといけないのじゃないかと思います。双方からの歩み寄りが必要だと思います。

ブリューネさん <フランス>

プライジンガーさん <ドイツ>

ファウスト　個人的なレベルでは外国人と日本人の交流は広く深くなっていると思います。日本人の文化を外国人に対して広めようという動きと、それから、外国人からの日本人への接触、その両面とも個人的レベルで広く深くなっている。

数年前、カナディアン・アカデミイで国際タウンミーティングというのがありまして、それに基づいて日本人の社会と外国人の社会の交流を頻繁にするということで、神戸ユニオンチャーチに「コミュニティ・ハウス」をつくり、「関西タイムアウト」という新聞をつくり、外国人からの日本人に対する働きかけが非常に盛んに行われて来たわけです。また、外国人の、能とか歌舞伎とか、日本の伝統に対する接近も行われて来たわけです。

食べることについても、大阪にもフランス料理とかイタリア料理がありますが、これはあくまでも日本化されたフランス料理、イタリア料理ですね。それに対して神戸では、純粋のそういうレストランがあり、本国と結びついたものが実際に神戸で賞味できます。

ブリューネ　料理の豊富さもひとつの楽しみじゃないかと思います。東京の人でさえ神戸へ行けば新鮮なものを食べられるといっていますよ。神戸へ行けば美味しいものを食べられるというイメージがあるらしいですね。

ただ、大阪の場合は、喰い倒れだといいますね。神戸の場合はどっちかというと着倒れといえるんじゃないですか。初めて神戸へ来たときは、ファッション、小物、アクセサリーの店がいかに多いかに気がついたんですね。非常にファッショナブルな感じですね。

シェラー　神戸の特に若い人々は身だしなみがいいですね。いいものを着ているのが目につく。特に女性は上から下までファッショナブルな服装をしている。ヘアスタイルが特に目につきますよ。

ファウスト　神戸の町を歩いても女の方が綺麗ですね。確かに、自然にも近い。しかし、何かをやろうと思えば非常に高くつく。日本でサラリーマン生活をしている方で、外国に行く機会のある方は外国でいろんな安いものを得られますが、そういった機会のない人は、何かしよ

うと思えば、高くつく。

私はこれから長くこちらに住もうと思っているのですが、こちらでいろんな方面で出会う人は、いい人たちですね。反面、一番悪いのは土地の値段です。特に最近、私は芦屋にマンションを買ったので痛感しています。

シェラーさん<スイス>

スタットマンさん<オランダ>

ファウストさん<アメリカ>

ブリューネ　土地が高いのは神戸だけではないですけどね。ただ、神戸ではホテルが全然足りないですね。

私はひとつ面白いことに気がついたんです。長く東京に住んで、他の地方のことはあまり考えたことがなかったんですが、こちらへ私のうちに勤めていたメイドさんをつれて来たわけですね。関東と関西の間にいろんな人間の違いがあるということで驚きました。メイドさんには、自分は関東の人間だ、こっちは関西の人間だという意識があるんですね。私はそこまでこまかい違いは分りませんが、しかし、ときどき、うちのメイドさんはこぼしていますね。これは、関西の人のやり方だとかね。私は、それほど地方の間に違いがあるとは今まで気がつかなかったわけですね。もちろん、これは神戸の特徴じゃないけれど、日本にはそういう特徴があるということに気がつきました。もちろん、フランスにもドイツにもイギリスにもあるでしょうが。

スタットマン　私個人の立場からいうと、神戸の異人館などいわゆる日本の古い建物が取り壊されつつある。それは経済的なことからそうなるのかも分りませんが、非常にもったいないですね。

★「ポーアイ博」はまだまだピー・アール不足

スタットマン　神戸市の内陸部はもう拡張できる状態にない。だから、ポートアイランドをつくるということは理想的であって、いい施策だと思います。そういうポートアイランドを重点的に見ているという理由から、総領事館は昔はオリエンタルホテルの向かいにあったのですが、なるだけポートアイランドの近くということで商工貿易センタービルへ移って来たんです。将来、総領事館をポートアイランドへ移すということも考えられるけれど、総領事館の職務はあくまでも船だけのことではなくオランダ人への世話とかがありますね。オランダ人は旧市街地に住んでいるので、まあ、その接点の今の場所が一番いいと思っています。お客さんが来たら、神戸の宣伝のため事務所の窓から港を見せているのですよ。

ブリューネ　ポートアイランドにホテルができるのはいいことですね。友だちが神戸まで来ても、仲々いいホテルがなくて、大阪まで逆戻りする場合がありますね。国際的な都市として、見本市があれば、それもとてもいい

ことだと思いますね。特に神戸は毎年何千隻の船が入って来ますから、その乗組員だけでも観光客としてかなりの数になると思います。神戸はどういう町であるかということを、ポートアイランドで紹介できたらとてもいいことだと思います。今のところでも、もちろん、あちこちと面白いところはありますが、やはり、一カ所で神戸はどういう町であるかが分るところはないですね。そこで、神戸の歴史も、外国の影響もどの程度だったかということも紹介すればいいと思います。

プライジンガー　ポートアイランドは日本とドイツの交流のシンボルだと思います。大分以前からドイツは人工島をつくるのに援助をしました。そのときには、ヨーロッパにとって、神戸の発展がいいかどうかまだハッキリ分りませんでしたけど、ドイツ銀行は信用しました。大分前から援助、協力をして来ました。ヨーロッパを紹介する展示場があれば、神戸とヨーロッパのいい交流のシンボルとなるでしょう。

ファウスト　計画の完了まで三年ほどありまして、まだプランニングの段階ですけれど、ホテルとか見本市会場とかが予定されているようですね。詳しいことについてはハッキリと知りませんけれど、今のところ見る限り、ビジネスに関係した人じゃない普通の人が行って、楽しんで歩ける場所がないように思います。一般の人の声が反映されるようなやり方が必要じゃないかと思います。また計画に対してのピー・アール、特に外人社会に対するピー・アールが必要じゃないですか。

シェラー　ポートアイランドは面白い計画だと思います日本人が未来に自信、信頼をもっていることが分りました。今、少しずつ詳細が分って、必要なのは経済、あるいは商業上の見本市、展示会場ですね。たとえば、大阪にも展示会場がありますが、フランクフルトとかミラノとか、そういった展示場に比べると非常に小さい。神戸だけではなく全関西に対しての展示場が欲しい。それとホテル、国際会議場が必要じゃないかと思います。こういったことをすべて押し進めることがリスクを含むものかどうか、今、判断できませんが、全体とすれば素晴しい計画だと思います。

プライジンガー　ポートアイランドはいいプロジェクトだと思います。経済的な目的ももちろんありますが、その他には、公園があります。文化ホールみたいなものもあります。ですから、ファウストさんがおっしゃったことは、ちょっと分りません。

ファウスト　公園もそうですが、たとえば、サッカーのようにジッと座ってそれを楽しめる、そういった場所がないのではないかということです。

プライジンガー　初めてプロジェクトについて聞いたとき、目的が経済だけだと思いましたが、書類を説明いただいて、クォリティオブライフということが分りました。

ブリューネ　詳しいことは分りませんが、ただ、ポートアイランドのオープニングに博覧会をやるということを最近聞いたんですが、できるだけ早く具体的にやらないとダメだと思いますね。ポートアイランドのオープニングとしては相応しいと思います。ただ、大規模の博覧会をやるとすれば、少くとも三年前から具体的な計画に入らないと非常に難しいですね。特に外国からのいろんな品物や文化財を紹介したいと思えば、やはり三年は決して長くはないと思います。

スタットマン　私はドイツに住んでいたので、ドイツのメッセ（見本市）はよく知っていますが、ポートアイランドにも見本市ができればいいと思いますね。

　三年後には博覧会が開かれるということですが、それについては知識がないので、具体的に意見をのべることはできないですが、ついこの間あった大阪の博覧会で見られたことですが、日本側の税関などの規制があまりにも厳しすぎる。これを何とかしないと、国際的な催しものを行う場合にはいろいろと弊害がでて来る。これが一番大きな問題だと思いますね。

（スタットマンさんは誌上参加をしていただきました）

田崎真珠㈱
取締役社長　田崎俊作
神戸市葺合区旗塚通6－3－10
TEL（078）231－3321

オールスタイル㈱
取締役社長　川上　勉
神戸市生田区伊藤町121
TEL（078）321－2111

カネボウベルエイシー㈱
取締役社長　稲岡必三
神戸市生田区三宮町1丁目17－4
センタープラザ東館8F
TEL（078）392－2101

㈱ベニヤ
取締役社長　松谷富士男
神戸市生田区三宮町1丁目54
TEL（078）332－3155

モロゾフ㈱
取締役社長　葛野友太郎
神戸市東灘区御影本町6丁目11番19号
TEL（078）851－1594

入船㈱
取締役社長　小泉進吉
神戸市灘区新在家北町1丁目1－19
（阪神電鉄新在家南）ブリコビル3F
TEL（078）851－3191

キャンペーン「国際文化都市神戸を考える」の企画は以上6社の提供によるものです。